

## 国語部会

### <県研究主題>

生徒一人ひとりの言語活動を充実させ、「伝え合う力」の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

### 提案1

提案者 山本 裕子（中地区）

### <研究主題>

「思考力・判断力・表現力を高める言語活動の工夫 ～総合的な学習の時間との関わりを通して～」

## 1 提案内容

語彙が少ない生徒の表現力を高めるために、総合学習と関わりを通して言語活動の充実を図る。金目中学校は平和学習が教育活動の大きな柱となっている。修学旅行での平和教育を絡めて和綴じ本を作ることにより、生徒の学習意欲を高めることができるのではないかと。

### (1) 課題設定の工夫

三年間を通して思考力・判断力・表現力を高めるために、相互評価を積極的に取り入れてきた。互いの良い点を認め合うことで、生徒は表現することに自信が付き学習意欲が高まる。

3年生では修学旅行記を和綴じ本で作成し、表現活動の集大成とする。平和学習で感じたことを的確に伝える表現力を身につけるために、語彙を増やし言語感覚を磨いていく。

### (2) 教科の視点から育成を目指す能力。

- ① テーマに即した取材を行い、自分の考えをまとめながら文章を書き、文集を編集する力。
- ② つくった俳句を互いに読みあい、表現の仕方などを評価して、自分のものの見方や考え方を深める力。

### (3) 指導の手立て

- ① 修学旅行記の編集作業と、章ごとの俳句創作の二つに取り組む。
- ② 修学旅行記の企画書をつくり、それに基づいて集めた資料を使って、構成を考える。
- ③ 自分の感動を伝えるように、歳時記、辞書を活用して、表現を工夫し推敲する。
- ④ 俳句を相互評価し、自分とは異なるものの見方やとらえ方にふれ、自己の表現力を高める工夫をする。

### (4) 研究の成果と課題

#### ① 研究の成果

- ア 全く書けなかった生徒が前向きに取り組め、書くことが楽しいと思えるようになった。
- イ 相互評価をすることによって、学習活動に積極的に取り組むきっかけとなり、生徒が自らの中にある語彙を活用し、表現力を磨いていく場にもなっていた。

#### ② 今後の課題

- ア 総合的な学習の時間との連携を密にする。当該学年の目指す学習に寄りそう形で行うためには、どうするかを考える必要がある。
- イ 文学的文章を扱うことが多くなった。指導内容のバランスを念頭に置く必要がある。
- ウ 言語活動を充実させる目的の確認。目的は思考力・判断力・表現力を高めるために行うことを忘れてはならない。

## 2 協議内容

(1) Q 思考力・判断力・表現力を高めることが目標なので、それに即した部分により指導内容の重点を置いた方が、より目的が明確になる。生徒はどのような力が身に付いたのか。

A 自己表現をする力が高まった。自己の考えを述べることに積極的になり、通り一辺倒でない表現ができるようになっていった。

(2) 感想 生徒を大切にしていることがよく分かった。相互評価だけでなく、一人ひとりと呼んで俳句の指導するなど、きめ細かい実践が行われていた。学習後の振り返りレポートに関心・意欲・態度があらわれるので、それを行いさらに相互評価して、最後に教師が評価するとよい。

(3) Q 生徒が目的意識をもてる活動になっている。相互評価でどのような工夫をしたのか。

A 相互評価のプリントで、前段階で良い点を指摘するように工夫した。

2年生のときも、短歌で良いと思う表現に全て線を引くように指導してきた。

## 3 助言 (厚木市立森の里中学校 西山幸太郎 校長)

(1) 県研究主題について

今回の発表では平和教育を基盤としながら、総合的な学習の時間と関わりをもたせたことがたいへん興味深かった。各教科との関連を図ろうとした姿勢は高く評価できる。

注意しなくてはならないのは、他教科の学習目標と合致するように連携していくこと。他教科の年間指導計画や教科目標を意識して、連携をとっていかなくてはならない。

(2) 授業の実践について

三年間指導した学年ということで、生徒の実態をよく把握して、授業が組み立てられていた。特にワークシートの作成には時間がかけられていて、細やかな工夫がされていた。

(3) 言語活動の充実について

各教科をつなぐ重要な視点であり、国語科がその中核として推進しなくてはならない。理科や社会のレポート、音楽や美術の感想文等でも、国語で身に付けた力が活用される。

今回の実践発表では相互評価を充実させたことにより、生徒自身の語彙が増え、表現力が高まり、自分の考えを表現することに意欲的になっていった。そのために、教師が適切な言葉、表現を用いなくてはならない。さらに、大切なのは生徒自身が安心して発表できる人間関係。学級経営にも深く関わる。職員間の人間関係も良好に保ち、同一教科の教師との共通理解や、他教科の教師との連携も重要である。

### 提案2

提案者 根田 もゆる (川崎地区)

<研究主題>

「教科の楽しさを伝え合う」

— 聞く構えを持って質問しよう —

## 1 提案内容

話を聞いている側の姿勢や聞き方によって、「話すこと」に対して苦手意識がなくなり、自信を持って話ができるようになるのではないかと。

(1) 課題設定の工夫

図書館の資料を使って各教科の魅力をクラスメイトに伝える活動を通して、自分の考えと比較し様々な視点を持って聞くという課題を設定した(『教科の楽しさを伝え合う』)。

## (2) 指導の手立て

① 「質問をあらかじめ準備し、聞く姿勢をもって発表を聞く。」

- ・何を質問したらよいかという事を想定して、「質問のコツ7」を提示。

② 「グループで発表」

図書室で5グループが同時に発表した。全体の前で発表するよりも緊張せず、お互いに目を合わせ、質問を考えながら聞くようにした。

③ 「聞く姿勢の評価」

図書室内にビデオを設置し、全グループの発表（聞き手側）を確認できるようにした。

④ 「自己評価によって身に付けた力の確認」

- ・聞き手の反応を意識し、質問されることを想定して発表できたか。
- ・聞く構えを持って発表を聞き、質問したり足りない情報を求めたりして自分の考えと比べながら聞くことができたか。
- ・伝え合った内容や質問の仕方を、今後の言語活動に生かそうとしているか。

※活動を継続し、学年で行っていくことが重要。様々な教科で活用し、力が付く。

## (3) 単元を貫く課題解決的な活動を通して

① 子ども自身に、身に付けた力を自覚させることが大切。

※ そのためには、一つの授業でねらいを絞ること。

## (4) 研究の成果と課題(○：成果，●：課題)

○ 「聞いてもらえる」と感じることで、発表に自信がもてるようになった。

○ スピーチの回数を重ねるにつれ、内容の分かりづらい部分を修正していく姿がみられた。

○ 「質問をする」意識をもって聞き、内容を考えながら聞くという姿勢がみられた。

○ 本単元の設定により、今までとは違う観点で「聞くこと」の活動を行うことができた。

● 1回だけでは「質問をしながら聞く力」は身に付かない。他の教科で積極的に活用できるように、学年で学習内容を共有していくことが大切。折にふれて生徒の力を確認し、様々な場面で指導を継続していく。

## 2 協議内容

### (1) 指導の手立てについて

① 質問の作成

<質問を作成させる時の注意点>

- ・質問を作成させる前には、準備が必要。質問内容の文例などを事前に学習しておく。
- ・質問をさせるときに事前情報を一切与えず、空白部分だけを考えさせる質問フォームをつくることにより、聞くという活動に集中できる。

② 図書室の活用について

<注意したことは>

- ・図書室で必要な情報を集め取捨選択をする。
- ・資料の提示や順番の決め方を指導する。

### (2) 思考力・判断力・表現力を見取るための評価場面・評価・方法について

① ねらいの焦点化

- ・学習活動に対して、「何のためにするのか」目的意識を持たせる。
- ・振り返りが自己評価だけでなく他者の評価も入るとよい。

・指導の中でのゴールを伝える、イメージをつかませることが大切である。

## ② 評価しやすいワークシート

・単元末に振り返りを丁寧に大切に行う。

・途中経過での自己評価が大切。

### 3 助言 (川崎市総合教育センター 須山 佳代子 指導主事)

・生徒一人ひとりの言語活動を充実させるには、生徒の実態把握が大切。

・課題を設定する際には、教師自身が「目的意識」「付けたい力」を明確に。

・今回の授業では、聞く力を育成させることに焦点を当てた。このことにより、話す力も身に付くということがわかる授業実践であった。

・学習の振り返りを丁寧にすることは、生徒自身が「何を学んだか」「どのような力が身に付いたか」を自覚することである。そのためには教師が、生徒自身に何を考えさせるのかを考えた学習展開や、評価の工夫が一層必要。

### 協議の柱に即した協議(グループ協議)

#### (1) 生徒同士が交流する場면을効果的に取り込むポイント

交流する目的を明確にする。単なるグループ活動ではなく、人数、配置等も組織的・戦略的に設定する。交流前の個の活動を充実させ、交流後に個に戻り、自分の思考が広がった実感を味わう。生徒の実態を把握して指導する。自分の意見を言いやすい雰囲気・環境作りが大切。失敗を許し、個性を認め合える関係。指導者の指示が明確で、生徒に考える時間がある授業。

#### (2) 思考力・判断力・表現力を見とるための評価場面・評価方法

目的意識、相手を明確にする。どんな力が付いたのかが実感でき、生徒の思考が明らかになる学習活動を組織する。ねらいと評価規準を具体的に明確に表す。単元末の振り返りで相互評価があるとよい。指導の中で具体的な到達の姿を示し、そのうえで学習活動をする。単元末の振り返りが学習を進めるうえで大切。記録するための評価と、学習を進めるための評価を分けて、日常的に指導の重点化を行っていくことが大切。

### 全体 のまとめ

○ 学習指導要領改訂のポイントの再確認

○ メタ認知能力

⇒初めに見通しを持たせ、最後に振り返る活動の中で、自らの学びを俯瞰し変容を自覚

○ 単元名の付け方一つで、学習の見通しを持たせることができる。

⇒メインタイトル：主たる言語活動から サブタイトル：指導事項から

○ 発信と交流を効果的に

⇒付箋を使用したり、条件設定をしたり、視点を明確にした相互評価を行ったりする。

○ 第2期教育振興計画

⇒「社会を生きぬく力」の養成、幼～高はその基盤としての「生きる力」の確実な育成

○ 国語は言語能力を育成する教科：単元を貫くのは言語活動を通して身に付けさせるべき指導事項

⇒ポイント：指導事項の理解，学習過程を課題解決的にデザイン，評価規準の具体化

○ 県教委から全教員に配付された「学習評価リーフレット解説編」の活用を！

○ 今求められているのは、思考・判断し、それを表現する学力